

氏 名	藤 井 美 穂
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 50 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 東 南 ア ジ ア 地 域 研 究 専 攻
学位論文題目	フィリピン・ココヤシ栽培農村における社会形成過程 —— ラグナ州の事例研究 ——

論文調査委員 (主査) 教 授 杉 島 敬 志 教 授 速 水 洋 子 准教授 阿 部 健 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、土地と人間との関係にかかわる文化概念に焦点をあて、かつ国内外の政治経済的な情勢や動態と関係づけながら、19世紀末から現在にいたるフィリピン・ルソン島ラグナ州低地におけるココヤシ栽培農村の形成、発展、変容の過程を明らかにすることを目的としている。

序章ではフィリピン低地社会を対象とする先行研究が概観される。フィリピン低地社会の研究は、稲作地帯における地主と小作間のパトロン・クライアント関係や、この関係を律する価値体系を中心に展開されてきた。そのため、低地社会が内包する地域差やその背景にある歴史的経緯については十分な研究がおこなわれてこなかった。序章では、先行研究が提示するフィリピン低地社会の画一的イメージを補完し、相対化するために、ラグナ州低地のココヤシ栽培農村を歴史的観点から研究することの意義がのべられる。

第1章では、まず調査村が位置するラグナ州のナカーラン町とその周辺地域における行政機構、経済活動、生態環境が概観される。つづいて親族の範疇、系譜資料、土地台帳の分析をとおして、以下の諸点が明らかにされる。フィリピンの低地社会はバイラテラルな親族組織によって特徴づけられてきたが、調査村では超世代的な土地相続に由来するリニアルな親族組織が成立している。19世紀末に調査村に入植した草分けの土地を現在に受けつぐココヤシ栽培自作農（メイルバ）を中心とする社会秩序が変容しながらも、現在にいたるまで存続している。オーストロネシア社会では社会秩序の中心的な構成要素が植物の根幹を意味する言葉で表現される場合が多いが、同様のことはメイルバや彼らの祖先についてもいえる。

第2章では、19世紀にココヤシ栽培が他の商品作物の栽培と連動しつつ急速に拡大される過程とともに、ココヤシ栽培の中心地となったナカーラン町のバヤン（市街地）の形成史や、バヤンの名家と教会が地域社会における文化的な範型となっていた状況がのべられる。そのうえで、19世紀末にバヤンから入植した数名の草分けをかわきりに、彼らが開拓したココヤシ園の経営を手伝うために多くの人々が住み着くようになった過程、草分けと後来者の所有地面積に大きな差の生じた経緯が、系譜資料や土地台帳の分析をとおして明らかにされる。

第3章では、1930年代にコプラ生産が活発化した状況とともに、コプラ生産所を所有する草分けの子孫と生産所を利用する後来者の子孫がどのような関係にあったかが詳細に検討され、草分けの子孫のなかからバヤンの名家を模範とするメイルバとよばれる人々が出現し、その社会的位置づけが定まってゆく過程が論じられる。また、第3章の末尾では、太平洋戦争の終結後、調査村をとりまく社会経済的な状況の変化に対応し、後来者の子孫たちが山地部での野菜栽培や稲作地帯への出稼ぎを開始し、メイルバとの関係が希薄化していくありさまが描きだされる。

第4章では、1970年代以降に生じた、コプラ生産の停止、養豚業の活発化、マニラや海外への出稼ぎ、現金収入源の多様化が調査村におよぼしたさまざまな影響とともに、メイルバを中心とする社会秩序が変容しながらも、存続してきた経緯が論じられる。そして、この経緯についての考察では、守護聖人像をめぐる祭祀活動や村人たちが日常生活でおこなう言語行為に着目することの有効性が示される。

終章では、第1章から第4章までの論述が概括される。そのうえで、序章における問題設定に立ち返り、フィリピンの低地社会が内包する多様性があらためて強調されるとともに、そうした多様性を比較し、理解するための基本的な視座はどのようにあるべきかといった問題や、こうした視座をオーストロネシアの基層文化に定位させる必要のあることが指摘される。そして、終章の末尾では、本論文では十分に論じられなかったいくつかの事象が将来の課題としてのべられる。

論文審査の結果の要旨

フィリピンの低地社会を対象とする先行研究では、稲作地帯における地主と小作間のパトロン-クライアント関係や、この関係を律する価値体系に大きな関心がむけられてきた。また、長期にわたるスペインの植民地支配とキリスト教の布教がおこなわれた結果、フィリピンの低地社会は、伝統文化を保持する山地民の社会とは異なり、オーストロネシア的な伝統文化を喪失した地域とみなされてきた。そのため、低地社会が内包する地域差やその背景にある歴史的経緯については十分な注意が払われてこなかった。また、オーストロネシア的な基層文化にもとづく東南アジアの他の地域との比較研究もほとんどおこなわれてこなかった。このような学史的背景のもとで、本論文の学問的貢献としてつぎの諸点をあげることができる。

- 1) 19世紀前半にはじまるマニラの国際的貿易港としての発展とマニラにいたる流通網の整備にともない、フィリピン・ラグナ州の低地では稲、ココヤシ、サトウキビの商品作物としての栽培が相互依存関係を保ちながら拡大していった。本論文は、先行研究では十分に考慮されてこなかった、こうした商品作物栽培の相互依存関係を鮮明に描きだすことで、フィリピン低地社会の歴史研究に大きく寄与している。
- 2) 本論文は、国内外の政治経済的な情勢や動態を視野にいれながら、フィリピン低地のココヤシ栽培農村がたどった19世紀末から現在にいたる、形成、発展、変容の過程を克明に記述しており、稲作地帯を中心に展開されてきたフィリピン低地社会の研究を補完し、相対化する視点を提供している。
- 3) フィリピン低地の社会組織は世代深度の浅いバイラテラルな親族組織によって特徴づけられてきた。本論文は、土地相続と親族関係にかかわる精細な資料の提示と分析をとおして、所有地の継続的な蓄積と超世代的な相続に由来するリニアルな親族組織が存在することや、大きなココヤシ園を所有するメイルパ（土地持ち）とよばれる自作農を中心とする社会秩序の持続性を指摘することで、フィリピン低地の社会組織には大きな地域差があることを説得的に論じている。
- 4) 1950年代以降、稲作地帯への出稼ぎ、山地部での野菜栽培、村内での養豚がおこなわれるようになり、1980年代からはマニラや海外への出稼ぎが活発化し、メイルパを中心とする社会秩序は大きくゆらいだ。本論文は、こうした社会秩序が変容しつつも、存続してきた経緯を解明する難しい作業に取り組み、守護聖人像をめぐる祭祀活動や村人たちが日常生活でおこなう言語行為に着目することの有効性を明らかにしている。
- 5) フィリピン低地社会の研究では、オーストロネシア的な基層文化に着目した東南アジアの他の地域との比較研究がほとんどおこなわれてこなかった。本論文はこうした比較研究の端緒を示している点でも注目される。オーストロネシア社会では社会秩序の中心的で根源的な構成要素が植物の根幹を意味する言葉で表現される。これとおなじように、メイルパやメイルパの祖先はプノ（根幹）のような存在と形容され、村落社会を包摂する社会秩序の起源的な中心とみなされてきた。

以上でのべたように、本論文にはフィリピン・ラグナ州低地における長期のフィールドワークとアーカイブにおける文献調査の成果が遺憾なく発揮されており、詳細な調査資料の分析をとおして、フィリピンの低地社会が内包する多様性を具体的なかたちで示すとともに、フィリピン低地社会の研究に新生面を切りひらく可能性をもつ、いくつかの視点を提示している点で高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年1月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。